

渡部悦和 陸自78 江崎道朗 共著

『言ってはいけない!』

『国家論』を読んで

柴田 幹雄 陸自75

本書は、2人の対談をまとめたものである。対談本は、今そこで持つてい哲学と知識だけで話を進めていくから、時には食い足りない本に出くわしたりする。が、本書は違った。2人の知識量が半端なものではないのだ。

元東方総監の渡部氏は、部隊勤務のほか、外務省安保課出向、ドイツ連邦軍指揮幕僚大学留学などを経験し、退官後はハーバード大学アジアセンターリサーチ員として2年間をボストン近郊で過ごした。

一方の江崎氏は、月刊誌編集長、国会議員政策スタッフを務めた後、現在は評論家、拓殖大学大学院客員教授、産経新聞「正論」メンバーである。安全保障、インテリジェンス、近現代史に幅広い知見をお持ちである。氏は難しいことを分かりやすく説明するのがうまいとの評もある。

二人の共通の懸念は、日本の将来である。日本が生き残り、世界で責任と名誉ある地位を占めるには、日本はどうするのが語られる。

内容は、6つの章からなっている。

以下3つの章について、ごく一部だが紹介する。

第1章「ハーバード大学から見たアメリカ」

ハーバード大学は、米国最古の大学で、米国のエリート集団を育て、世界中から留学生、研究員が集まってくる。あらゆる面で世界最高レベルの知の集団が揃っている。

ところがハーバード大学における日本の地位は全くもって低い。一番存在感があるのは中国である。そして同大はパンダ・ハガー（親中派）に席巻されている。『ジャパン・アズ・ナンバード』の著者であるエズラ・ボーゲル教授も中国に対する認識が極めて甘いこと等が述べられ、渡部氏は「いぶんボーゲル教授と議論を戦わせたようだ」。

中国の次に勢いがあるのは韓国である。韓国からは母親が子供と共にアメリカに来て高校へ行かせ、ハーバード大にも入学してくる。英語による発信力は日本人の比ではない。

ハーバード大学を卒業した超エリートの中には、すさまじいまでの戦略的頭脳で、大統領をうまく使っても自分の利益に結び付けるような連中がいる。アメリカを見る上でそういう視点も重要と結んでいる。

第3章「したたかなドイツ、混乱の韓国」

ドイツ人と日本人は似ていると言われるが、全く違う。大きな違いは責任の感覚。第2次世界大戦についても責任はヒトラー個人にあるとするドイツと、軍部という連帯責任にした日本との違いである。結果的に当時の国防軍は非難の対象にならず、現在のドイツ連邦軍は軍としての連続性を維持している。第2次世界大戦で戦った組織編制、戦術、戦法、作戦全てが受け継がれていることにある。

教育の中で、実弾射撃訓練中に死者が出た時にどうするかという課題が出た。学校の模範解答は、訓練継続だった。実戦で射撃中に死者が出るのは当たり前だから、射撃訓練継続しつつ処置をするのだという。また演習時の指揮所は2つ構成し、交代で活動する。自衛隊ではそんな贅沢は出来ないが、実戦を考えれば全く合理的な考え方がある。

この後は韓国、台湾に話が進むが、この項では特に江崎氏の持論展開が面白い。

第4章「習近平の中国に学べ」

中国の夢、それは「中華民族の偉大な復興」であり、科学技術大国を目指す。スパコン、量子技術、AI技術も米国に肉薄している。そのための予算を組んでおり本気度は本物である。中国の経済成長はこのまま続く

のか、技術立国などと言っている日本は大丈夫か。

中国の持つ軍事力で、米国・欧州では脅威でなくても、地理的に近い日本には脅威になりうるという点に注目し、「力の均衡」に対し「脅威の均衡」という視点を提示している。米国はいまだに超大国だから日本は米国を後ろ盾にすれば大丈夫というのは現実を見ないという警告している。

他に「トランプのアメリカと米中新冷戦」「ハイブリッド戦の時代に我々は…」そして「日本はどうすべきか」の章がある。日本は暴走しないように自制しさえすればいいのか、それとも世界から尊敬される国になるため一歩踏み出すのか、そういった議論に進む。深みのある話が続くが、誌面の都合もあり、後は是非本を手にとって読んでいただければと思う。

(扶桑社 1600円)

